

るのは、この谷川の水が細くなり、やがて谷が埋まっていった過程と時を均しくしているようにも感じられる。

この谷川に沿った地が、鴨町と名づけられたのも、極めて興味深い。かつて川水豊かに流れていたであろうこの長い沢地には、かの『新古今和歌集』における「三夕の歌」として名高い西行法師の

心なき身にもあはれは知られけり 鴨立つ沢の秋の夕暮れ

の歌のような光景が現出されていなかったであろうか。西行のこの歌は、勿論川越の地で詠まれたものではない。しかし、初雁城の異名が示すように、川越城近辺は、水鳥の多く渡来する水郷の地であったろう。その中でも、ことさら鴨(普通は旅鳥であるが、種類によつては、一年中いるものもあるという)の類が常に訪れたり、あるいは繁殖したりする沢としてこの地が知られるようになり、やがて城下町の発展とともに、水の用意ある馬場となり、そこに善太なる人物が、馬具などを拵える鍛冶屋として登場して来たのではなかったろうか。鴨と鍛冶屋の善太が結びついて、町名とされるに至った経緯は、ここにあると思われるのである。

話を始めに戻そう。武蔵野の境の榎が、蓮馨寺の門前にあったというのは、正しくこの北側に流れていた谷川で広大な武蔵野が終わっていたということ、物語っていたのである。道興准后の歌は、この川を前にして、その対岸に小高く広がる河越の里を日にして詠んでいるのである。すでに当時、河越には、太田道真・道灌父子の手によって、河越城が出来上がっ

ていた。道真が、心敬や宗祇を招いて、城内の三芳野天神社前で連歌会を催し、「河越千句」も生まれていた(文明二年(一四八六))。町としての発展は、どれほど進んでいたかは定かでないが、草深い武蔵野の果てに、文芸の花は咲いていた。原野を分け入つて来て、川で跡切れた地の向かいに見えた

河越の里は、ひよっとすると、かの『伊勢物語』の中の在原業平らしき男が訪ねて恋をした「三芳野の里」そのものだったかもしれないという感さえ喚び起こす。界を論ずこの川が存在は、武蔵野を北上して来る旅人によって、普く知られていたことであろう。

また、武蔵国は奈良時代末(宝亀二年(七七二))に、それまでの東山道から東海道へと所屬を替えた。当然の結果として、都との文化交流経路は、従来の上野国方面よりも、相模国方面からの方が本流となつて来る。以後の文学に出て来る「武蔵野」は、ほとんどが岡府から北上して描かれたり、想定されたりした姿である。『伊勢物語』にせよ、『更級日記』にせよ、そして「とはすがたり」にせよ。歌枕をよそに、自らの足で奥を極めた者こそが、水鳥すだく河越の地を望めたわけである。

そうなると、この蓮馨寺北の谷川は、単に武蔵野の境を示す川だけだったのではなく、あるいはこの川こそ、河越の名を決めた川だったのかもしれない。占米、河越とは、入間川を越えた地、もしくは赤間川を越えた地ゆえに名づけられたとされて来た。しかし、文化の流入が東海道筋から北上して来ていたとなると、一番命名に力

ではあるまいか。ともあれ、入間川・赤間川そしてこの谷川、どこから河を越えねば辿り着けない言わば孤立の地、それでこそ河越だったのであろう。

川越の地誌が書き遺してくれた武蔵野の境の榎。この古木は、ま

さに川越の由来をも語ってくれた証人だったのである。

【付記】本文中において、中世までの川越については、「河越」の表記を採った。

使用した地誌二種は、次の本文

に依つた。

「川越素麴」……「新編埼玉県史資料編10近世1地誌」所収。
「三芳野名勝図会」……「校注武蔵三芳野名勝図会」(川越市立図書館刊 平成六年三月)。